

メディアアーティストの藤幡正樹がディレクション  
アートとテクノロジーの専門家育成プロジェクト「藝術と技術の対話（DAT）」  
札幌国際芸術祭2027とブルックリン実験アート財団（BEAF）を  
パートナーに、札幌とニューヨークで展覧会を開催

展覧会をつくり出す育成対象者「DATプロジェクトメンバー」の募集説明会を  
2月22日（日）に開催。



モエレ沼公園 Photo by TAKUMA Noriko



株式会社イッカク（所在地：東京都台東区、代表取締役：廣田ふみ）が主催するメディアアートやデジタルアート等のアート＆テクノロジー分野の専門家育成を目的としたプロジェクト「藝術と技術の対話（DAT）」（通称：ダット）では、**札幌国際芸術祭2027とブルックリン実験アート財団（BEAF）**をパートナーに迎え、札幌とニューヨークでの展覧会を実地研修（OJT）の環境とした人材育成プログラムを開始します。

本プロジェクトは、日本の文化芸術におけるアート＆テクノロジー分野の持続的な発展に寄与するため、講座や調査研究、ブートキャンプ、国内外での展覧会の企画・実施、シンポジウム等の多角的なプログラムを通じて、批評と対話を促進する専門家の育成を目指すものです。

2026年2月22日より、**本プロジェクトの育成対象者として国内外で展覧会をつくり上げる「DATプロジェクトメンバー」の募集を開始**。同日には、募集・選考の詳細についてオンライン説明会を開催します。

#### 開催概要

### 藝術と技術の対話（DAT）

公式サイト：<https://dat.1kc.jp>

#### 「DATプロジェクトメンバー」募集説明会

日時：2026年2月22日（日）14:00～16:00 ※YouTube配信

登壇：藤幡正樹（メディアアーティスト）、

廣田ふみ（アートプロデューサー／株式会社イッカク代表取締役社長）



主催・企画制作：株式会社イッカク 助成：文化芸術活動基盤強化基金（クリエイター等支援事業（育成プログラム構築・実践）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

この機会に、取材や記事掲載にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

【広報に関する問い合わせ先】

「藝術と技術の対話（DAT）」事務局 [株式会社イッカク内] Email：[hello@dat.1kc.jp](mailto:hello@dat.1kc.jp)

※内容は、都合により変更になる場合がございます。

l kkac

## 藝術と技術の対話（DAT）

国内外の専門機関をつなぎ、アート&テクノロジー分野のアーティストやプロデューサー、キュレーター、研究者等の専門家を育成する新たな教育基盤を構築。

「藝術と技術の対話（DAT）」は、国内外の多様な専門機関を連携パートナーとし、展覧会を実地研修（OJT）としたアート&テクノロジー分野の実践的な育成環境を構築していきます。

今般、2027～2028年に開催予定の展覧会をはじめとする育成カリキュラムのパートナーとして、**札幌国際芸術祭2027**と**ブルックリン実験アート財団（BEAF）**を決定しました。

主催・企画制作：株式会社イッカク

助成：文化芸術活動基盤強化基金（クリエイター等支援事業（育成プログラム構築・実践））

｜独立行政法人日本芸術文化振興会

**DAT**  
Dialogue on Art and Technology  
藝術と技術の対話



### ▶ 藝術と技術の対話（DAT）連携パートナー

#### 札幌

### 札幌国際芸術祭

Sapporo International Art Festival  
Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa

札幌国際芸術祭2027（SIAF2027）

会期：2027年1月16日（土）～2月21日（日）

札幌において、世界からのアート作品や新しい表現を紹介することを通じて、発見や学び、参加の機会を作り出す取り組みとして2014年より開催。3年に一度の芸術祭を核としながら、学校や地域コミュニティ、企業などと恒常的に連携し、札幌における創造的な環境づくりを進めている。**DATでは、札幌国際芸術祭2027と連携し、モエレ沼公園を会場・コンセプトとした展覧会を開催予定。**

主催：札幌国際芸術祭実行委員会、札幌市

#### ニューヨーク



ブルックリン実験アート財団（BEAF）

アートとテクノロジーによる文化交流の促進と新しい創造的实践を支援することを目的に2024年に設立された非営利団体。アーティスト・レジデンス、展覧会、講演、研究プロジェクトを通じて、多様なコミュニティ間の対話の場を創出し、テクノロジーとアイデアを統合する新たな方法の探求に取り組む。**DATでは、2027年にBEAFと連携したフィールドワークや展覧会を開催予定。**

### 3月7日（土）には、SIAF2027との連携イベントを開催！

DATのエグゼクティブ・ディレクターの藤幡正樹と

フラグメンティン

スイスのアートコレクティブ・fragmentinによるトークイベント

SIAF2027オープントーク

「アーティストと考えるモエレ沼公園の可能性」

日時：2026年3月7日（土） 14:00～16:00（開場13:30）

会場：札幌市図書・情報館1Fサロン（札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ内）

参加無料／要申込（1月27日（火）15:00より事前申込開始予定）／先着順（定員50名）

登壇者：Marc DUBOIS（fragmentin）、Laura NIEDER（fragmentin）、

藤幡正樹（メディアアーティスト／DATエグゼクティブ・ディレクター）

司会：細川麻沙美（SIAF2027フェスティバルディレクター）

※開催言語：日本語（英語話者による発言には逐次通訳が入ります。）

※詳細・申込 <https://siaf.jp/event/25164/>

主催：札幌国際芸術祭実行委員会/札幌市 協力：在日スイス大使館、藝術と技術の対話（DAT）



fragmentin

## 藝術と技術の対話（DAT）とは

「コンセプト構築」と「2つの展覧会」を目標に、  
講座・調査研究から展覧会の実現までを目指す総合的な教育プロジェクト

「藝術と技術の対話（DAT）」は、日本の文化芸術におけるアート＆テクノロジー分野の持続的な発展に寄与するため、客観的なコンテキストの構築と価値基準となるコンセプトを提示し、批評と対話を促進する専門家の育成を目的とするプロジェクトです。

本プロジェクトの目標は「コンセプト構築」と「2つの展覧会の実現」。国内外で開催する展覧会をOJT（実地研修）の環境とし、作品やコンセプトを言語化する能力、そして鑑賞体験を通じて知的刺激と対話を生み出す展覧会の策定能力の育成に取り組みます。

2025年11月からはプロジェクトの第1弾となる講座シリーズ「アート＆テクノロジーの概念構築」（全7回）を開催中。現在までに230名以上が、メディア・技術・美術・哲学を通じた広範なテーマの講座を受講しています。



講座シリーズ「アート＆テクノロジーの概念構築」（全7回）の開催の様子

開催中

藝術と技術の対話（DAT）

講座シリーズ「アート＆テクノロジーの概念構築」（全7回）

協力： TOKYO NODE LAB

期間：2025年11月～2026年5月 受講申込受付中

講師：藤幡正樹（メディアアーティスト） ※ゲストあり

オンライン：Zoomウェビナー 会場：TOKYO NODE LAB（虎ノ門ヒルズ ステーションタワー8階）ほか

料金：一般 ¥6,000 | U25 ¥3,000

本講座は、①Zoomウェビナー視聴（当日）、②会場参加（当日）、③アーカイブ視聴（開催後）の3種類での聴講が可能です。

### ▶ 藝術と技術の対話（DAT）エグゼクティブ・ディレクター



藤幡正樹（FUJIHATA Masaki） メディアアーティスト

日本のメディアアートのパイオニア。80年代はコンピュータ・グラフィックス、90年代はインタラクティブアートやネットワークをテーマにした作品を制作。その後、GPSを使ったフィールドワークシリーズを展開。現在は、ARを扱ったBeHereを継続中。1996年、アルス・エレクトロニカ（リンツ、オーストリア）で日本人初のゴールデン・ニカ賞を受賞、2010年文化庁「芸術選奨」文部科学大臣賞、1989年から慶應義塾大学環境情報学部、1999年東京藝術大学、2005年大学院映像研究科の設立に参加。東京藝術大学名誉教授。2017年はオーストリアのリンツ美術大学、2018年は香港バプティスト大学、2020年はUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の客員教授。

#### 【藤幡正樹氏コメント】

このプロジェクトでは、「藝術と技術、西と東の相対化」を目標とし、育成対象者と共に概念構築を行い、その成果を2つの展覧会で発表する。

藝術と技術の関係は、表現と技術、メディアと技法という形で極めて密接であり、藝術作品の具現化にとって、技術はなくてはならない要素である。ところが、急速に発達したデジタルメディアを巡る芸術の現場では、最新の技術を上手に扱うことができて、その本質を掴み取り、新たなアートの地平を開く作品は多くない。この新しいメディアの固有性を見抜くことをテーマとして生まれたのがメディアアートである。

現在、技術の進化は、すでに人間の知性の領域にまで及んでおり、生成AIでは絵画イメージや映像をプロンプトによって作り出せる段階にまで来ている。このように人間の歴史を丸ごと資源として発達した人工知能は、このまま進めば完全に非人間化の域に達することになるだろう。その時、最後の砦となるのは藝術であることは間違いない。メディアアートはその復権のための最前線に立つことになる。